アリストパネス

高津春繁編

世界古典文学全集

12

筑摩書房

アリストパネス　　世界古典文学全集　第12巻

昭和39年5月25日発行

訳者代表　高津春繁
発行者　古田晁
印刷者　山元正宜
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町 2—8
振替東京 4123　電話(291) 7651

目次

アカルナイの人々　村川堅太郎訳　5
騎士　松平千秋訳　51
雲　田中美知太郎訳　89
蜂　高津春繁訳　131
平和　高津春繁訳　173
鳥　呉茂一訳　205
女の平和　高津春繁訳　253
女だけの祭　呉茂一訳　289
蛙　高津春繁訳　319

女の議会　村川堅太郎訳　363
福の神　村川堅太郎訳　399
解説　高津春繁　429
地図
索引・年表

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アリストパネス

アカルナイの人々

登場人物

ディカイオポリス
触れ役
アンピテオス
ペルシア大王のところから帰ったアテナイの使節たち
プセウダルタバス
テオロス
アカルナイの人々のコロス
ディカイオポリスの娘
エウリピデスの召使
エウリピデス
ラマコス
メガラの男
二人の少女　すなわちメガラの男の二人の娘
告訴常習者
ボイオティアの男
ニカルコス
ラマコスの召使
百姓
花聟の附添人
使者

〔背景は三軒の民家。中央のはディカイオポリスの家で両側にエウリピデスとラマコスの家が並ぶ。舞台の手前は民会の議場たるプニュックスの台地を二、三の長椅子により象徴的に示している。ただし議場は空席でディカイオポリスただ一人開会を待ちくたびれている。いらだたしげな身振りあってのち独白〕

ディカイオポリス　心を噛まれる思いをしたのもそもそも幾度か。嬉しい目にはとんと会わぬ。全くとんとない、四度きりだ。痛い目ときたら、これに引きかえまさに浜の真砂だ。さあ、一つ考えてみよう、何か欣びの名にふさわしい目にあったことがあるかな？　はて、思い当った。あれは心もはればれする見物だった。クレオンめが吐き出しおった五タラントン[3]はな。これにはわしも有頂天になったものだ。それでわしはこの手柄ゆえに、騎士の連中[4]に惚れとるのだ。ヘラスにふさわしいことだからな。　(八)

すると今度は悲劇がかった痛い目を見せられた。アイスキュロスの作[5]を口をあけて待っとると、奴は「テオグニス、謡い方を入れて[7]」と呼ぼうじゃないか。これでわしの心臓がどれほど揺すぶられたと思いなさる。

だがまだ嬉しかったのはモスコス[8]のあとをうけてデクシテオス[9]がボイオティア節[10]を謡いに出たときだった。ところで今年はたまげて眼玉を白黒させてしもうた、あのカイリス[11]が軍歌をうなろうと這い出したのを見たときには。　(一六)

だがわしは産湯をつかってこの方今日日ほどに石鹸が目にしみたことはありませぬわい。と申すのは早朝の主要民会[12]だとあるのにこのプニュックスには人っ子一人見当らぬ。奴らは広場[13]でべちゃくちゃしゃべりながらあっちこっちと赭土[14]を塗った縄をよけるのに大わらわだ。当番の評議員の連中もまだ現われないが、遅くやって来て互いに押し合いへし合いするんだろう。どやどやと流れ込んでいちばんの椅子の

取り合いをするさまはまさに名状すべからずだ。ところがいかにして平和をもたらすかについてはいっこうに心を使わぬ。おお祖国よ、祖国よ。わしはいつでも民会へ一番乗りにやって来て腰を据える。するとたった一人なので溜め息をつき、あくびをし、手足を伸ばし、屁をひる。退屈のあまりに地面に絵を描き、むだ毛を引き抜き、勘定をする。平和をねがいつつ田舎の方をうち眺めると町方はつくづくいやになり、自分の在[1]が恋しうなる。わしの村じゃ「炭[2]はいかが」とか「酢は、オリーヴ油はいかが」なんてのは聞いたためしがなく、「いかが」なんてことはそもそも知らなかった。何でも村でできるんで「いかが」さまはござらなかった。[3]

さて本日ここへまかり出たのはほかでもない。いささか所存あってのこと、もし誰か和議以外のことをしゃべろうものなら声はりあげて弁士の邪魔をし悪態を放ってやるためだ。

〔このとき当番の評議員たち登場〕

そら見ろ、評議員先生どもの正午（おひる）のご臨席ときた。言わんこっちゃない。わしのご託宣の通り、前列の席へと皆して押し合ってござる。

触れ役　〔集った市民たちに向い〕前へ進んで、お祓いをしたなかまで進んで。[4]

アンピテオス　もう誰かしゃべったんですか。[5]

触れ役　〔大声にて〕発言希望者はありませんか？

アンピテオス　はい私。

触れ役　誰です？

アンピテオス　アンピテオスで。

触れ役　じゃ人間じゃないですな。

アンピテオス　いかにも。不死の身です。と申すのは初代のアンピテオスはデメテルとトリプトレモスのあいだに生まれ、この人の子がケレオスで、ケレオスの妻パイナレテは私の祖母に当ります。その伴がリュキノス[6]で、その子が私というわけです。かくて不死身の私ひとりに神々はラケダイモン人と和約を結ぶことを委ねたもうた。さて私は不死身ではあるが、諸君、路銀をもちませぬ。当番評議員（プリュタネイス）たちがよこさないので。

触れ役　弓持ち[7]ども！

〔二、三の弓をもった警吏、彼を演壇から引き下そうとする〕

アンピテオス　おおトリプトレモスとケレオス！　見殺しになさるか？

〔アンピテオス議場のそとに曳き出される〕

ディカイオポリス　〔立ち上って〕おお議員諸君、そりゃ民会を汚す行ないだ。われわれのために和議をとり結び、干戈（ほこ）を納めることを企てた者を曳っぱり出すとは。

触れ役　〔ディカイオポリスに向い〕席について黙っていろ。

ディカイオポリス　アポロンにかけてわしは黙りはせぬぞ。議員諸氏がわしのために和平の動議をせぬかぎりは。

触れ役　〔大声にて〕大王[8]のもとへのお使者たち。

ディカイオポリス　〔聞えよがしの独白〕なるほど大王とな。わしはお使者だとか、奴らの孔雀[9]だとか瞞着（へつぺん）だとかにはうんざりしとる。

触れ役　静粛！

ディカイオポリス　〔ペルシア風の衣裳で登場した使者たちを認めて〕これはこれは！　おおエクバタナ！[10]　そのかっこうは何だ！

使者の一人　〔尊大な調子で〕諸君がわれわれを大王のもとへ一日二ドラクメの手当を給して派遣せられたのはエウテュメネスのアルコンの年[11]であった。

ディカイオポリス　〔独白〕おお気の毒なドラクメだ。

使者の一人　そしてカユストロスの野[12]をのらりくらりと進むのはまことに心（しん）の疲れることであった。天蓋つきの轎[13]のなかにやんわりと身を横たえて寿命を縮めてゆく。[14]

ディカイオポリス　〔独白〕わしときたら城壁のところで藁[15]に寝て元気旺盛だったが。

使者の一人　盛んに歓迎の宴が催され、われわれはやむなくぎあまん[16]と

黄金の盃で生の美し酒[1]を飲まされた次第であった。

ディカイオポリス　〔独白〕おお、祖国クラナアイ[2]よ、汝に使節どもの嘲弄がわかるかな？

使者の一人　けだし夷狄の民が人間とみなすのは牛飲馬食しうる者のみだからである。

ディカイオポリス　〔独白〕われわれのあいだじゃ遊冶郎と衆道の達人に限るようになな。

使者の一人　われわれは四年目に王宮に到達いたした。しかるに大王は軍隊を引き具して雪隠へと赴かれ、八カ月のあいだ黄金山[3]の上にしゃがんでおられた。

ディカイオポリス　そして尻をつぼめたのはいつだ？

使者の一人　満月のときであった。[5]ついでご帰館の途につかれた。しかるのちわれわれを歓待せられ、壺で丸焼きにした牛[6]を幾頭も出されたのであった。

ディカイオポリス　〔独白〕牛の壺焼きなぞ見たものがあるものか。法螺を吹くにもほどがある。

使者の一人　またゼウスに誓って申すが、クレオニュモス[7]の三倍もある鳥をわれわれに振舞われた。その名は詐欺[8]と申したが。

ディカイオポリス　それでお前はわれわれを欺しとるんだな。二ドラクメも取りおって。

使者の一人　さてわれわれはプセウダルタバス閣下[9]を、かの「大王の眼[10]」でいらせらるるお方をお連れ申した。

ディカイオポリス　〔独白〕烏が貴様の使節面をつついて眼玉をくり抜くがええわ。

触れ役　〔大声で〕「大王のお目付役」ご入来。

〔滑稽な服装で一つ目入道の面をつけた人物が二人の宦官風の男を従え、その高い地位にふさわしく悠々と登場〕

ディカイオポリス　おお、ヘラクレスさま！　神々も照覧あれ、この人間め、軍船の姿[11]を装うたか？　あるいは岬を廻って船渠を捜すというか？　一つ目の下についとるのは櫂の巻き革[12]かな？

使者の一人　さあ閣下、大王がアテナイ人に告げるようにと閣下を派遣された要件をお話しください。プセウダルタバス殿。

プセウダルタバス　いあるたまん　えくさるくす　あなびっそない　さとら[13]。

使者の一人　あなた方、閣下の仰せられることわかりますか？

ディカイオポリス　アポロンにかけてわしにゃわからぬ。

使者の一人　大王が諸君に黄金を送るだろうと言っておられる。〔プセウダルタバスに向い〕閣下、黄金というところをもっと大声にはっきりと願います。

プセウダルタバス　あなた金受け取らに、ゆるふん　やおにあ人[14]。

ディカイオポリス　やれやれ、情けなや、こりゃまことにはっきりしとる。

使者の一人　いったい何と仰せられるのですかな？

ディカイオポリス　何だと？　イオニア人はゆるふんだと仰せられる、毛唐から黄金を期待する[15]ようではな。

使者の一人　いや、このお方は幾つもの行嚢につめた黄金のことを言うておられる。

ディカイオポリス　なるほど行嚢とな。貴様えらいべてん師だぞ。消えて失せろ！　わしが独りでこやつを調べてみせよう。〔プセウダルタバスに向い〕さあ、はっきりと白状するのだ――〔拳を見せつつ〕これが見えないか――それともサルディス染め[16]に染めあげてもらいたいか。大王はわれわれに金を送るというのか？

〔プセウダルタバス首を上にあげて否定する〕

ではわれわれは使者どもに一杯食わされたわけか。

〔プセウダルタバスと二人の宦官、首を下げて肯定する〕

こやつらはみんなヘレネス流にうなずいたぞ。確かにこの土地廻りの者にちがいない。二人の宦官のうち、こいつは誰だかわしはちゃんと知っとる。シビュルティオスの伴のクレイステネスだ[17]。おお、せっ

かちな尻を剃り上げた[1]奴め！　猿知恵[2]にこんな髯で宦官を装ってわれわれのもとへまかり出たのか？　（三三）

〔この時ディカイオポリス彼の面をはがし無髯の顔をむき出す〕

こっちは、はて誰だったか？　たしかストラトン[3]じゃなかったかな？

触れ役　静粛、着席。評議会[4]が「大王の眼」閣下を迎賓館[5]にて迎えられます。

ディカイオポリス　こりゃまさしく首を絞められる思いだ。ところでわしがここでぶらついてるのに、あの連中の歓迎を妨げる戸口は一つもない、と言うのか？　よし！　一つ大それた仕事に乗り出そう。そこでと、アンピテオス先生はどこにおいでだ？

アンピテオス　〔議場に馳せ帰って〕ここに控えております。　（三六）

ディカイオポリス　おぬしにこの八ドラクメ[6]をつかわすゆえラケダイモン人との和議を結んでくだされい。ただし相手はわしと子供らと家内だけですぞ。〔評議員や他の市民たちに向い〕おぬしがたは勝手に使者を送ってあくびしとるがええわ。[7]

〔ペルシア帰りの使者の一行、「大王の眼」などこれまでにすでに退場〕

触れ役　〔大声で〕シタルケス[8]に使いしたテオロス殿[9]、どうぞ。

テオロス　はい。

ディカイオポリス　また別口のいかさま師が呼び出されたぞ。　（三九）

テオロス　われわれとても永らくトラキアにとどまるわけではなかったが――

ディカイオポリス　〔独白〕仰せの通り、もしもしこたま日当を貰えるんでなかったらな。

テオロス　たまたま雪が全トラキアを覆い、河川ことごとく凍結ということがなかったなら。

ディカイオポリス　〔独白〕それはまさしく当市でテオグニス[10]が競演に出たころというわけだ。　（四〇）

テオロス　そのころ私はシタルケスと飲みつづけておりました。実のところこの仁は途方もないアテナイびいきで心底から諸君に惚れ込んでおった証拠には「美しきアテナイ人」と壁に落書きするのがつねであった。先のころわれわれがアテナイ市民権を賦与いたした彼の息子[11]はアパトゥリア祭[12]のソーセージが大好物で、祖国[13]を援助せんことを父君に懇願したのであった。すると彼は瀉奠を行なって援助を誓ったのであるが、それもなみたいていのことではない、アテナイ人に「何と大した蝗虫[14]の群がおいでなすった」とうならせるほどの軍勢を動かす由である。　（四一）

ディカイオポリス　〔独白〕貴様がここで並べ立てるのを一つでも真に受けるくらいなら、くたばったほうがまだましさ、もっとも蝗虫の一件は別だがな。[15]

テオロス　そこで今やご本人がトラキア中のもっとも好戦的なる一種族を諸君のために送った次第である。

ディカイオポリス　〔皮肉な調子で〕そりゃ全く議論の余地なしだ。

触れ役　テオロス氏のお連れ申したトラキアの方々、どうぞこちらへ。

〔トラキア人革製の男根もあらわに登場〕

ディカイオポリス　〔独白〕こりゃまた何とも迷惑なこと。

テオロス　〔大声で〕オドマントイ族[16]の軍隊。　（四四）

ディカイオポリス　〔独白〕オドマントイとな。いったい何としたことだ。トラキア人の「息子」を裸にした[17]のは誰だ。

テオロス　この方々に二ドラクメの日当を呈すればその楯[18]で実にボイオティア全土を蹂躙するであろう。　（四〇）

ディカイオポリス　〔独白〕このむけまら野郎どもに二ドラクメか？　ほんに軍艦の漕ぎ手[20]、国家の干城[21]が聞いて泣くだろうて。

〔オドマントイたち、ディカイオポリスのにんにくの入った袋を奪う〕

やれ情けなや、こりゃたまらん！　オドマントイの野郎わしのにんにく[22]を横取りしおった。そのにんにく下におろさんか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

テオロス　このやくざ者め！　このにんにく食らった者ども[1]には近寄らぬがよいぞ。　（一六六）

ディカイオポリス　議員方、わしがこんな目にあってるのを見殺しにされるか。それも自分の国で夷狄（えびす）どもの手にかかって。もうやめるがええわ。民会をトラキア人の日当のために開くなどは禁物だ。言わんこっちゃない、ゼウスさまのお告げが、[2]ぽつりぽつりと落ちて来おった。

〔俄か雨〕

触れ役　トラキアの方々は退場してまた明後日ご出頭ください。議員方が民会を解散されますから。　（一七三）

〔評議員たち、触れ役、テオロス、オドマントイ退場。ディカイオポリス独り居残る〕

ディカイオポリス　ええいまいましい。サラダ[3]の大損害だ。

〔アンピテオス息せき切って登場〕

ところでアンピテオスがラケダイモンからご到着だ。ご機嫌よう、アンピテオス君。

アンピテオス　〔息をはずませて〕駈け止るまでは、それどこじゃない。

アカルナイの連中に追いつめられて逃げてるとこです。　（一七七）

ディカイオポリス　どうしたんだ？

アンピテオス　わたしはあんたのための条約を持って急いでやって来ました。するとアカルナイの年寄りどもが嗅ぎつけ[4]たんです。あのマラトンの勇士[5]で、屈強頑健な、まるで樫（かし）か楓（かえで）みたいな[6]老人どもです。そこで大声張り上げどなることには「この汚れた奴め、わしらの葡萄が伐り倒され[7]てんのに、和議を結ぶ気か」って。それできゃつらのぼろ服に石を集めて入れおった。私は逃げる一手。奴らは大声あげて追っかける始末で。　（一八五）

ディカイオポリス　勝手にどなるがええわ。だが和約はできたかね？

アンピテオス　はいたしかに。三通りの見本[8]がござんして。これは五年間の和議ですが、一つお毒味願いましょう。

ディカイオポリス　〔一本の葡萄酒瓶から一口味わって〕なっちょらん！

アンピテオス　どうしました？

ディカイオポリス　こりゃごめんだ。瀝青（ちゃん）と建艦の臭い[9]がするからな。

アンピテオス　じゃこの十年の和約をお毒味ください。

ディカイオポリス　〔別の瓶から味わって〕こいつはえらく酸っぱくて外国への使節とか同盟国の暇つぶしのような臭いがする。　（一九三）

アンピテオス　じゃこれは三十年間の和約で陸上海上を問わず[11]有効です。

ディカイオポリス　〔渡された瓶から味わって満悦の態で〕おおディオニュソス祭[12]、こやつの風味はアンブロシアにネクタル[13]だ。「三日間の糧食用意[14]」なぞどこ吹く風といった味だ。そして口に含めば「どこへでもお気に召すまま」と言ってるようだ。こいつを頂戴してお神酒（みき）に供え飲み干すといたそう。アカルナイの先生どもは「さらばご機嫌よろしう」だ。わしは戦争だの災難なぞとはもう縁を切ったんだから家にはいって[15]在方（ざいかた）のディオニュソス祭[16]と行こう。　（二〇一）

アンピテオス　私はあのアカルナイの奴らから逃げるとしましょう。

〔アカルナイの炭焼きの老人どものコロス登場、歌を歌いながら
アンピテオスを追跡の形〕

コロス　皆の衆、この方角だ。追っかけろ。通りかかった者がありゃ、誰彼なしにきゃつのことを訊こうぞ。
奴を捉えるのは国家のため。〔観客に向って〕さて
もしどなたかあの和議を持参した奴の行方を
ご存じの方はお知らせ願います。

とり逃がしたわ。影も形も見えはせぬ。
寄る年波にゃかなわぬもの。
若かったころ炭俵背にひっかつぎ
パウロス[17]にくっついて走った時分の
わしに追っかけられたとしたら、この和約の媒（なかだち）だとて　（二一〇）

かようにやすやすと逃げもできねば、軽々と失せもせなんだろうに。
今じゃ向う脛はすっかり硬ばり
老骨ラクラテイデス[1]の脚も重うなって　(二二〇)
捉えそこねたわ。したがやるまいぞ。
老いたりとはいえ名にし負うアカルナイ人の手を逃れ、大あくびと
はまいらぬて。

きゃつこそは、おおゼウス大神はじめもろもろの神々、
敵と和議した憎い奴。
わしらときたらその敵に腹立ちまぎれの戦いを、
荒された地所のそのゆえに、いよいよし激く仕掛ける覚悟だ。
そして尖って痛みの激しい葦……のようにぐさりと　(二二〇)
奴らにつき刺さって、わしの葡萄畠を踏みにじるのを
止めさせぬうちは、どうして、戦さの手を緩めるどころか。

何はともかくきゃつをば捜して、石打村の方[2]に目を配り、
見つかるまでは山を越え谷を渉っても追いかけようぞ。
こんな男にゃどれだけ石を投げたとてわしの腹はおさまらぬ。

〔舞台は同じであるが民会の議場たるプニュックスではなくてディカイオポリスの田舎の家の気持〕

ディカイオポリス　〔背景の家のなかから重々しい声で〕静粛、静粛。
コロスの長　みなの衆、おだまりなされ。方々、あの「静粛」の言葉を
聞かれたか？　これこそてっきりわれらの捜す当人ですぞ。だが一同
しばらくこちらへ身を潜めましょう。きゃつは贄を捧げに出てくるこ
と間違いなしだ。　(二二〇)

〔コロス一時退場〕

〔ディカイオポリス家の中から出て来て、巨大な男根を先につけた棒を運ぶ二人の奴隷と、聖什を容れた籠を運ぶ彼の娘とからなるディオニュソス祭の行列の出発の準備を整える〕

ディカイオポリス　静粛[3]、静粛。籠の運び手はもう少し先に出て。〔奴隷の一人に向い〕クサンティアス、男根棒を真直ぐに立てるんだ。
〔娘に向い〕お前は籠を下して。お供えをはじめるんだから。
娘　お母さん、こちらにおしゃじを渡してくださいな。このお煎餅にスープを注ぎますから[4]。　(二四一)
ディカイオポリス　さあ、それでよしと。〔厳粛な口調で〕おお、主ディオニュソス。家族一同とともにとり行ないまする行列と供犠が御心に叶い、軍役に煩わされずに在のディオニュソス祭をつつがなく相済ませますように、かつはまた三十年の和約がわが身の幸となりますように。〔娘に向い〕さあ、お前は籠をめでたく立派に運ぶんだよ。ぴりっと締った顔つきでな。お前にまぐわいをする人は何て仕合せなんだろう。きっと明け方[5]にはお前に劣らずおならの名人てな鼬をこさえるだろう。さあ出発だ。人混みのなか[7]で誰かにうっかりお前の黄金の小間物をかじられないようよくよく気をつけるんだよ。〔奴隷に向い〕おい、クサンティアス、お前ら二人の役目は籠持ちの後から男根棒をしゃんと立ててくことだ。わしは陽根歌を歌いながらついて行こう。〔妻に向い〕お前は屋根から見物しといで。さあ出発だ。　(二五二)

〔ディカイオポリス一人で歌う〕

おおバッカスの伴なるパレス[9]、
お主は酒神の飲み相手、ぬば玉の夜の放浪者。
間男・衆道の達人よ。
六年ぶりに[10]在に帰り
主の名呼べば心も躍る。
独り気ままに和議したからにゃ
戦争騒ぎは他人のこと
ラマコス風情[11]はわしゃ知らぬ。　(二六〇)

遙かにまさった愉しみは、おおパレス、パレス、
色気のついた薪取り
ストリュモドロス[1]の婢のトラキア女がわしがもち山[2]で
盗むところを見つけ出し、腰をつかまえ持ちあげて
倒した揚句にやることだ。
パレス、パレス。

お主がわしらと飲むときにゃ、どんちゃん騒ぎのそのあとで
朝っぱらから飲み干すは、これぞ平和の盃だ。
楯は囲炉裏にぶらさげて。

〔コロス再び登場〕

コロスの長　これこそ当の本人だ、こやつこそ。　(二六〇)
投げろ、投げろ、投げろ、投げろ。
〔ディカイオポリスに向いコロス石を投げるが、当らぬ〕
打って打って打ちのめすのだ、この卑怯者めを。
投げんか、投げんか。

〔ディカイオポリス動ぜず、行列をするはずの娘と二人の奴隷はこの間に退場〕

ディカイオポリス　〔儀式用の壺を抱きしめつつ〕ヘラクレスさま。こりゃ何としたこと。壺[3]が毀れるて。
コロス　やっつけ　たいのは　おぬし自身　性根の腐った　この頭！
〔右の五句に応じてコロス大股に五歩ディカイオポリス目がけつめかける〕
ディカイオポリス　そりゃまたいかなる仔細あって？　アカルナイのご老人がた。
コロス　お飢ねとあらば教えて進ぜよう。おぬしこそは恥わきまえぬいまいましい奴。お祖国への裏切者。独り勝手に和議とり結び、おめおめわしにつらを向けるとは。　(二九〇)
ディカイオポリス　だがおぬしがたはわしが何ゆえ和議したかをご存じあるまい。さあ、お聞きくだされい。
コロス　おぬしのいいわけ聞くとな！　くたばりおれ。飛礫で埋めてくれるわ。
ディカイオポリス　いや、せめてはわしの言い分聞いた後に願いたい。ご立派な方々、まあちょっとお控えくだされい。
コロス　控えちゃおられぬ。問答無用。
わしがおぬしを嫌うのは、その皮剝いで切り刻み　(二〇〇)
騎士の靴底にしようと思うかのクレオン[4]にも劣らぬのだ。
ラコニア人と和約したおぬしの長談義
聴く耳持つどころか、あくまで仇がとりたいのだ。
ディカイオポリス　おお方々。ラコニア人はさておいてわしの和約が立派かどうか、しばらくお聴きくだされい。
コロスの長　立派とはよくも吐かした。祭壇[5]も握手も誓言もない相手と和議したおぬしとしたことが。
ディカイオポリス　わしはよう心得とる。われらが激しく責め立てるラコニア人にしてからが、今日の騒動をいっさいがっさい引き起した者とは腑に落ちぬ話。　(三一〇)
コロスの長　いっさいがっさいではない、とな。この不埒者め。かようなこと臆面もなくわれらに向ってほざく気か？　それ聞いてこのわしが捨ておけるとでも思うたか？
ディカイオポリス　すべて、とは申されぬ、すべてとは。このわしがことこまかに述べ立てりゃ、あの人たちとてわしらを怨むふしぶしのあるのが分明と相成ろう。
コロスの長　これはまた前代未聞の不思議な言葉。おぬしが仇のためにわれらに向い弁じ立てるとは。
ディカイオポリス　してもしわしの言い分が誤りで、みなの衆のお気に

召さねば、俎に首さし延べてしゃべってもよろしいですぞ。

コロスの長　さあ、村の衆、どうしてさっさと石を投げんのだ。こやつを飛礫でほぐして[1]緋染めの衣に織らんちゅう手はないぞ。（三四〇）

ディカイオポリス　おぬしがたの心のなかの黒い燃えさしがまた赤々とおこってきましたな。お聴きなさらんか。ほんとうにお聴きくださらんか。アカルネウス家のご一統[2]。

コロスの長　いや決して聴くわけにはまいらぬ。

ディカイオポリス　〔深刻に〕ではこのわしは恐ろしい目にあうわけだ。

コロスの長　おぬしの言うこと聴くよりは、命を捨てるがまだましだ。

ディカイオポリス　そうは言いたもうな、アカルナイの方々。

コロスの長　必定ただちに死すべきことを覚悟めされい。

ディカイオポリス　さらばわしもおぬしがたを噛み殺して進ぜよう。こちらでもおぬしがたのいとしいうちにもこのうえない者を殺してくれよう。おぬしがたの間から人質をとってあるによって、一つ連れて来て切り刻んでやりましょう。〔ディカイオポリス家のうちにとび込む〕

コロスの長　〔コロスに向い〕はて村の衆。あの脅し文句はわれらアカルナイ人に向って、どういうつもりであろう。よもやお互いの誰かの子供を家のうちに閉め込んどるのではあるまいな。さもなけりゃ何でああ大胆に振舞うのか。（三四〇）

〔ディカイオポリス小刀と古びた炭籠とを持って現れる〕

ディカイオポリス　さあ飛礫なぞは御意のままだ。〔炭籠を指しつつ〕わしはこいつをやっつけるのだ。即座におぬしがたのうちで誰が炭を可愛がるかがわかるというわけさ。

コロスの長　南無三宝。この炭籠はわしの同村の者[3]でござる。なにとぞしばらくご猶予を。お待ち、お待ちくだされい。

ディカイオポリス　いくらでも喚くがええ。殺すことには変りはござらぬ。わしは断じて耳はかしませぬぞ。

コロス　そやつに劣らぬ永の年月、炭を愛した己が身を切られるような切ない思い。

ディカイオポリス　先刻わしが頼んだ折にも、おぬしがたはいっかな聴こうとはせなんだじゃないか。

コロス　こうとなったら、お気に召すまま、ラコニア人へのおのろけを、一つ手放しにやるがええ[4]。いとしい炭籠だけはどうあっても見殺しなどはできぬのだ。（三四〇）

ディカイオポリス　まあ第一にその石ころを地面にあけなされ。

コロス　〔石を捨てて〕すっかり地面にあけました。おぬしもその短刀を置きなされ。

ディカイオポリス　だが着物のどこかにまだ石が隠れちゃいないかな。

コロス　〔踊りめぐりつつ〕地面に向けて払い落した。ごらんの通り着物はひらひら。口実はもうやめにして、おぬしも打物を置きなされ。踊りめぐるに従って、着物はかようにひいらひら。（三四〇）

ディカイオポリス　〔勝ち誇って〕おぬしがたはまさに大声張りあげるところだった。今すこしでパルネス山の炭までも胆を潰したはずじゃ。それも同村の衆の心なさにはじまったこと。〔己の着衣の汚れを指しつつ〕ほれ恐ろしさのあまり、この炭籠はまるで烏賊のように粉炭をこんなにもらしましたぞ。情けない話だが、人の心というものは、たとえてみれば未熟の葡萄のようなもの。だからじきに打つの怒鳴るのとおっぱじめるが、公平な議論には耳をかそうとせぬ。わしは俎の上に首さし延べてまでラケダイモン人のために申し開きをしようと肚をきめたのだったが。だがわしだとて命の惜しい道理には変りはござらぬ。（三四〇）

コロス　なぜにおぬしは戸口からその俎を持ち出して、なあ、頑固な親爺どの、おぬしの大風呂敷をひろげなさらぬ。わしとしてはおぬしの心のうちを知りとうてならぬ。ところがおぬしが自分から裁きの形を決めたからにゃ、俎をここに並べたうえでしゃべり出すのが筋道だ。

〔ディカイオポリス家のなかから俎を持ち出し舞台の中央に置

く〕

ディカイオポリス　さあ、ごろうじあれ、俎はこの通り。また演説をしようというのはこのちっぽけな男一匹。もちろんゼウスにかけて誓ってよいがわしは断じて楯のうしろに身を隠すなどの卑怯はせぬ。ただひたすらラケダイモン人に味方して自分の意見を吐くまでだ。とはいえ懸念の種は数々ある。百姓どもの遣り口は、誰か一人のいかさま師が先生たちや国家をばいわれの有無にかかわらず賞めさえすればそれこそたちまち有頂天だ。この手にかかって知らぬあいだに売ったり買ったりされてるのだ。年寄りどもの心のうちをわしはすっかり見抜いているがあの人たちの生き甲斐は判決で噛みつくことただ一つだ。かく申すわし[3]がクレオンのために去年の狂言[3]で会うた災難は骨身にこたえて忘れもせぬ。と申すのはこのわしを評議会へと引きずり込み悪口雑言、舌三寸に嘘八百を並べ立てキュクロボロス[4]の濁流みたいに騒然と罵りつづけたのだ。お蔭さまでこのわしは泥にまみれ、すんでのところでお陀仏さ。ところでまず演説開始といく前に一つごめん蒙ってできる限り哀れな姿[5]をいたしたい。　(三六四)

〔ディカイオポリスはエウリピデスの作品『テレポス』で観客によく知られていた乞食姿のテレポスの雄弁の故事にちなみ、姿をやつしたのち演説にかかろうと立ち去りかける〕

コロス　なぜかように身をかわし、辞を設けて引きのばすのだ。それがしとては、ヒエロニュモス[6]から、黄泉にあるという暗闇の蓬髪の兜[7]を[8]おぬしが借りてこようと苦しうない。或いはまたシシュポスの知恵をめぐらすもよかろう。この論議には遁げ口上の余地はないのだ。

ディカイオポリス　〔悲劇風に〕いよいよ決意を固めるべきときだ。そこでエウリピデス先生を訪ねにゃならん。

〔在の自分の家から遠路アテナイ市中のエウリピデスの家を訪ねることを示すために舞台をそろそろと歩き廻った後に背景の第二の戸口を訪ねる〕

〔玄関番の奴隷に向って〕これ、これ。

玄関番　どなたかね？

ディカイオポリス　エウリピデス先生はお宅かね？　(三六五)

玄関番　〔悲劇の調子を真似て〕ご不在でもあり、おいでにもなる[9]——おわかりですかね？

ディカイオポリス　おいででもあるが、ご不在とは？

玄関番　全くおっしゃる通りで、ご老体。魂はよそにお出ましで歌の文句を捜してござるがご当人はお宅の高いところ[10]で狂言をつくっておられるで。

ディカイオポリス　〔感嘆して独白〕おおまことに幸多きエウリピデス、召使までがかように聡明な応待をするとは。〔奴隷に向い〕で、あの人をちょっと呼び出してくれんか。

玄関番　〔戸口をしめつつ〕そりゃかないませぬ。

ディカイオポリス　さもあろうが……わしは立ち去りませぬぞ。一つ戸をたたいてみよう。〔戸口をたたきつつ〕エウリピデス、エウリさん。〔悲劇の口調で〕今までにも、もしや誰かに耳かされたなら、なにとぞ一つお聴き入れを。かく呼ばわるはわたし——コレイダイ[11]のディカイオポリスなる者で。　(四〇六)

エウリピデス　〔家のなかから〕だが暇がない。

ディカイオポリス　せり出し[12]で出てくださるまいか？

エウリピデス　それもかなわぬ。

ディカイオポリス　そこを一つまげて……。

エウリピデス　ではせり出しでお目にかかろう。降りる暇[13]はないのだ。

〔エウリピデスせり出しで高いところに現れる〕

ディカイオポリス　エウリピデス！

エウリピデス　何てけたたましい声を立てるんだ。

ディカイオポリス　高いところでご執筆ですな。下だっていいでしょうに。どうりでびっこがたくさんできるってわけですな。ところでなぜ

そんな悲劇に出てくるような襤褸をご着用なんです。そぞろ哀れを催すお召し物ですな。なるほど乞食をたくさん出しなさるのも合点が行く。ところでエウリピデス先生、先生の両膝にかけてお願いしますが何か旧い出しもののなかから襤褸を一着拝借できませぬかな。コロスの方々に向って長広舌[1]をふるわにゃなりませぬ、演説に一つつまずいたら、命にかかわるというわけでして。

エウリピデス　どういう襤褸かね。〔壁にかかった面の一つを指しつつ〕この薄倖の老人オイネウス[2]が舞台に着て出たやつかね。

ディカイオポリス　オイネウスのどころじゃない、もっとみじめな人のを。（四一〇）

エウリピデス　盲のポイニックス[3]のかな？

ディカイオポリス　いや、ポイニックスのでもない。ポイニックスよりひとしおみじめな仁ので。

エウリピデス　この人はいったいどういう破れ衣がほしいんだ。乞食のピロクテテス[4]のじゃないか？

ディカイオポリス　いや、それより幾層倍か乞食らしい人のです。

エウリピデス　〔他の面を指しつつ〕じゃお前さんの欲しいってのはこのびっこのベレロポンテス[5]の着てた穢い着物かね。

ディカイオポリス　ベレロポンテスとも違います。もっともわたしの考えてる人もやはりびっこでしたが、物乞いをしておしゃべりやで、口八丁という仁でした。

エウリピデス　思い当った。ミュシアの人テレポス[6]だろう。

ディカイオポリス　いかにも、テレポスで。お願いでござんす。どうぞこの仁の襤褸を拝領いたしたい。（四三）

エウリピデス　〔奴隷に向い〕おいこの人にテレポスの破れ衣を渡してくれ。テュエステス[7]の襤褸の上でイーノー[8]の奴とのあいだにあるんだ。

〔ディカイオポリスに向い〕さあ、そいつを持っていきたまえ。

ディカイオポリス　〔破れ衣を観衆に穴が見えるようにひろげつつ〕おお、森羅万象を洞見し、照覧したもうゼウス大神[9]、わしに能う限りみじめないでたちを与えたまえ。

〔破れ衣を身につけた後エウリピデスに向い〕エウリピデス先生、これをくださったご親切に甘えて襤褸につきもののあれもご無心願えませぬか。つまり頭にのっけるミュシアの帽子のことでして。〔悲劇口調で〕「実を申せば今日という今日乞食の役をせにゃなりませぬ。中身はいつもと変らぬながら、姿形を偽りまする。」見物衆はわしの正体を先刻ご存じだが謡い方のご連中は馬鹿面さげて立ち並び、わしの舌三寸に手玉にとられる、といった寸法でして。（四四）

エウリピデス　進ぜよう。〔悲劇口調で〕「そちこそは猛き心にこまかな細工をめぐらす者だ。」

ディカイオポリス　〔帽子をかぶりつつ感謝して〕先生にはよいご果報を。したが「テレポスに対して[10]はわしが心に思いめぐらす運命を。」〔衣裳の効果を欣びつつ〕しめたぞ。早くも味な文句が口をついて出るわ。ところでこのうえは乞食の杖もいただきとうなりました。

エウリピデス　〔杖を渡しつつ〕こいつを貰ったらとっとと「石造りの館よりまかり去れ。」[11]

ディカイオポリス　〔悲劇口調で〕おおわが心よ。そちの見る通り、このわしはまださまざまの小道具がなくてはならぬのに御殿から逐い払われる。さあおぬしはしっこく食い下っておねだりをするのだ。エウリピデス先生。ランプの火で焼けほげた籠[12]を一つくださらんか。

エウリピデス　おぬしとしたことが、柳籠なぞ何に使うのか。

ディカイオポリス　何とていり用はございませぬが、欲しうてかないませぬ。（四五）

エウリピデス　〔籠を渡しつつ〕うるさい人だな。とっととわが家より立ち去りたまえ。

ディカイオポリス　これはしたり！　どうぞお仕合せに――ちょうど昔先生の母者びと[14]がさようであったふうに。

エウリピデス　もう帰ってくれんか。

ディカイオポリス　いえ、あとたった一ついただけませぬか。縁のぶっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com